

スイートピー新品種 ‘湘南オリオン’

柳下良美・山元恭介¹⁾

New Sweet pea "Shonan Orion"

Yoshimi YAGISHITA and Kyosuke YAMAMOTO¹⁾

摘 要

既存品種に無い青色系花色の冬咲き性スイートピー品種育成を目的として交雑育種に取り組んだ。1987年に‘茅ヶ崎11号’×‘パティオ’の組み合わせで交配を行った。以後、高性個体の自殖を繰り返したところF₃で草型は高性、花色が青味紫の系統を得た。形質の固定を図るためさらに自殖を繰り返し、F₁₁で草型は高性、開花の習性は冬咲き性、旗弁色は青味紫で、分離の見られない系統を得た。1～2月の低温期にも花弁周縁部まで均一に発色し、栽培期間を通してボリューム感のある切り花が得られる。この系統を‘湘南オリオン’と命名して品種登録に出願し、2004年3月3日に品種登録された。

キーワード：冬咲き性スイートピー品種、青味紫、湘南オリオン

Summary

In order to develop new varieties of winter-flowering type sweet peas with bluish flower color, breeding experiments have been conducted since 1987 in a cross of "Chigasaki #11" with "Patio". After successive inbreeding of the hybrid, we selected a line showing tall-type of plant growth with bluish flower color. At F₁₁ generation, a stable line was fixed which possesses traits of winter-flowering habitat, tall-type and strong bluish-purple flower. This line bears vigorous flowers without petal variegation even in the periods of January and February under chill condition. The line was registered as a new variety with bluish-colored sweet pea designated as "Shonan Orion" on March 3rd, 2004.

Key word : winter-flowering type sweet pea, strong bluish purple, Shonan Orion,

緒 言

神奈川県におけるスイートピー栽培の歴史は古く、明治末期に露地切り花栽培が三浦半島で始まり、大正中期には温室切り花栽培が行われていた。昭和4年に本格的な営利栽培が神奈川県湘南地域で始められ、昭和30年代には全国一の産地となった(井上 1981)。

昭和60年頃より品質保持剤の本格的普及や需要の増加から、新しい産地が形成されて産地間競争が激しくなった。その結果、市場で神奈川県のスィートピーの占める割合が減少してきた(井上 1996)。神奈川県では、開花に低温、長日条件を必要としない冬咲き性品種の栽培が中心であったが、当時は品種数が少なく優れた特性を持つ新品種が求められるようになった。このような背景

第1表 スイートピー‘湘南オリオン’の草丈、節間長、葉形、葉柄着生部の色及び開花の習性

品 種	草丈(cm) ¹	節間長(cm) ¹	葉形	葉柄着生部の色 ²	開花の習性	早晚 ³
湘南オリオン	65.9	14.1	卵形	有	冬咲き性	晩
対照品種						
ガラティア	68.1	12.5	楕円形～卵形	無	冬咲き性	中
茅ヶ崎11号	67.2	8.7	卵形	無	冬咲き性	晩

¹下から15番目の着生葉が展開したときの草丈、²第1花柄着生節から下へ第1番目の節間の長さ、³第1花柄着生部のアントシアニン発現の有無、⁴冬咲き性の中の開花期の早晚

を受けて、県内の栽培条件に適した冬咲き性で新規特性を有する品種の作出を目的に1987年から交雑育種に取り組んだ(山元 1993)。この結果、これまでに既存の冬咲き性品種には見られない淡黄色の花色をもつ品種を育成した(山元 1994)。

その後、1987年に交配を行ったものの中から冬咲き性で花色、花形等の形質が有望と判断される系統が得られたので、その育成経過と特性について報告する。

育成経過

1987年3月に、旧神奈川県園芸試験場のガラス室で、‘茅ヶ崎11号’(草型は高性、花色は濃ピンク、開花の習性は冬咲き性)と‘パティオ’(草型はわい性、花色は混色、開花の習性は冬咲き性)のそれぞれ1個体を親として交配を行い種子を得た。交配の際は‘茅ヶ崎11号’を子房親に、‘パティオ’を花粉親とした。‘パティオ’の交配に用いた個体の花色は不明である。得られた種子を1987年8月下旬にガラス室内栽培床に直播した。以後、毎年の播種時期は同様で、1987年から1994年は旧神奈川県園芸試験場、1995年から2000年は神奈川県農業総合研究所のガラス室で栽培を行った。

開花したF₁の開花の習性は全て冬咲き性を示し、草型は高性、旗弁色は明赤味紫(日本園芸植物標準色票カラーコード8905)となった。これらの個体を自殖させF₂種子を採取した。

F₂の草型は、高性が19個体及びわい性が1個体に分離した。高性の旗弁色は、紫ピンク(同9203)1個体、明赤紫(同9506)4個体、鮮赤味紫(同8906)9個体及び明紫(同8604)5個体で4色に分離した。わい性の旗弁色は明紫(同8604)となった。草型が高性で、旗弁色が明紫の個体を自殖させF₃種子を得た。また、開花の習性はF₂以降全て冬咲き性となった。

F₃の草型は、高性が18個体及びわい性が1個体に分離した。高性の旗弁色は、鮮紫ピンク(同9203)3個体、

鮮紫(同8605)8個体及び明青味紫(同8305)7個体に分離した。わい性の旗弁色は鮮紫(同8605)であった。高性で明青味紫の個体を自殖させF₄種子を採種した。

F₄の草型は、高性が13個体及びわい性が2個体に分離した。高性の旗弁色は、鮮紫ピンク(同9204)2個体及び明紫(同8604)11個体に分離した。わい性の旗弁色は、鮮紫ピンク(同9204)及び明紫(同8604)がそれぞれ1個体となった。高性で明紫の個体を自殖させF₅種子を得た。

開花に至ったF₅の9個体の草型は全て高性で、旗弁色は青味紫(同8310)となった。形質の固定を確認するため、さらに自殖を繰り返したところ、F₆の9個体及びF₇の26個体では草型、旗弁色ともに分離が見られなかった。F₆の26個体は、草型は全て高性で分離が見られなかったが、旗弁色は紫(同8612)1個体、明紫(同8604)1個体、鮮紫(同8905)1個体、浅青味紫(同8303)1個体及び青味紫(同8310)22個体に分離した。旗弁色が青味紫の個体を自殖させF₉種子を得た。

開花した25個体のF₉の旗弁色は青味紫(同8310)となった。F₉を自殖させて得たF₁₀の51個体について旗弁色を調査したところ、青味紫(同8310)が49個体の他に明赤味紫(同8905)及び鮮赤紫(同9207)が1個体ずつ分離した。青味紫を自殖させて得たF₁₁の54個体では、いずれも旗弁色は青味紫(同8310)、草型は高性、開花の習性は冬咲き性に揃い、形質が固定したと判断された。

1999～2000年に、この系統の特性調査を行った。対照品種の‘ガラティア’((株)サカタのタネ)及び‘茅ヶ崎11号’との区別性が認められ、切り花品質、収量性ともに、冬期温室栽培の切り花用品種として有望と判断して、‘湘南オリオン’と命名した。種苗法に基づく品種登録を出願し、2004年3月3日に品種登録された(登録番号第11732号)。

品種の特性

交配親の‘茅ヶ崎11号’及び同系の花色をもつ‘ガラティア’((株)サカタのタネ)を対照品種として、1999~2000年にかけて特性審査基準に基づき特性調査を行った。

また、2000年2月下旬に色差計S Z-Σ90(日本電色工業(株))を用いて旗弁及び翼弁花色の反射測定を行った(試料測定径 6mm)。

‘湘南オリオン’の草型は高性で、葉形は‘茅ヶ崎11号’と同様に卵形である。対照品種として用いた‘ガラティア’及び‘茅ヶ崎11号’と異なり、葉柄着生部にアントシアニンが発現し着色が見られる(第1表)。

開花の習性は、発蕾、開花に低温、長日条件を必要としない冬咲き性で、冬咲き性の中での開花の早晚性は‘ガラティア’より3週間程度遅い晩性である(第2表)。低温処理をしない種子を8月下旬~9月上旬に播種すれば、年内から開花が始まる。

花色は、旗弁が青味紫(同8310)、翼弁が明青味紫

第2表 スイートピー‘湘南オリオン’の発蕾節位及び発蕾日

品 種	発蕾節位 ^z	発蕾日 ^y
湘南オリオン	32.5	11月21日
ガラティア	28.0	11月1日

2000年8月下旬に播種し、3~4葉で摘心した。
^z発蕾が確認された平均の展開葉位、^y発蕾が目視で確認された平均日

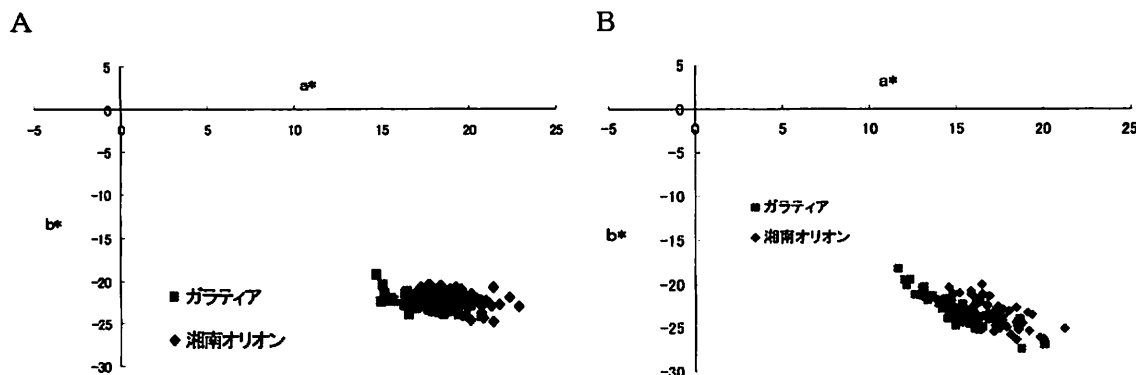
(同8305)で対照品種の‘ガラティア’に比較して、旗弁及び翼弁ともに赤みが強い(第3表)。旗弁及び翼弁ともに、色差計を用いた反射測定によるa^{*}値は‘ガラティア’に比べプラス方向にシフトしており、同様の傾向が確認された(第1図)。

1~2月の低温期にも花卉の周縁部が緑味を帯びず、花卉全体で均一に発色する。気温が高くなる栽培後期において、やや花色が薄くなる傾向が見られる。花形は花卉が完全に展開するオープン花であるが、‘茅ヶ崎11号’に比べて花卉の波打ち程度が大きい。花径は約5cmで‘茅ヶ崎11号’よりやや大きく、‘ガラティア’と同程

第3表 スイートピー‘湘南オリオン’の花色及び花の大きさ

品 種	花 色 ^z			花 ^y の大きさ(mm)						
	旗弁	翼弁	舟弁	花径	旗弁長	旗弁幅	翼弁長	翼弁幅	舟弁長	舟弁幅
湘南オリオン	青味紫 8310	明青味紫 8305	浅青味紫 8303	49	41	53	40	35	25	15
対照品種										
ガラティア	明青味紫 8305	明青紫 8004	淡青紫 8302	49	42	52	39	39	28	14
茅ヶ崎11号	明赤紫 9206	明赤紫 9206	鮮紫ピンク 9205	48	41	50	39	34	26	14

^z日本園芸植物標準色票カラーコード、^y第5花柄3~4輪開花期の第1または第2小花



第1図 ‘湘南オリオン’の旗弁色及び翼弁色におけるa^{*}値及びb^{*}値の分布

2000年2月下旬に旗弁及び翼弁中央部を色差計を用いて反射測定を行いa^{*}値及びb^{*}値を測定した。a^{*}値及びb^{*}値はL^{*}a^{*}b^{*}表色系の色度を表す。Aは旗弁色、Bは翼弁色で測定した。



第2図 '湘南オリオン' の切り花



第3図 '湘南オリオン' の立毛状況

度である（第2図及び第3図）。

花柄長は約53cmで一般の品種と同程度であるが、気温が高くなる収穫後期においても草勢の衰えが少ないため、収穫期間を通じて花柄が長く、太くてボリュームのある切り花となる。1花房あたりの小花数は、5～6輪程度である（第4表）。

第4表 スイートピー‘湘南オリオン’の花柄長、花柄径及び小花数

品 種	花柄長(cm)	花柄径(mm)	小花数 ²
湘南オリオン	52.7	4.1	5.5
対照品種			
ガラティア	50.0	3.7	5.8
茅ヶ崎11号	41.2	3.0	4.3

¹花房あたり的小花数

栽培及び利用上の留意点

栽培管理法は、一般的な冬咲き性品種と同様であるが、10～11月に栄養成長が旺盛になり、発蕾が遅れる傾向があるため、発蕾までの草勢調節に注意が必要である。しかし、春先まで生育が旺盛であるため、安定した収量が得られる。

現在、スイートピーは淡色の品種が多く、青味が強い深い紫色の花色は印象深く、さらに他の花と組み合わせ、アレンジメントやブーケなどへの利用が可能である。

命名の由来

既存の神奈川県育成品種が、ギリシア神話にちなんで命名されており、本品種は、深い青紫色の男性的な花色を有するので、ギリシア神話の勇者オリオンにちなんで‘湘南オリオン’と命名した。

引用文献

- 井上知昭. 1981. 湘南のスイートピー. p1-246. 湘南温室組合. 神奈川
- 井上知昭. 1996. わが国の花き生産の現状と動向. スイートピー. 農業及び園芸71: 195-200
- 山元恭介. 1993. スイートピーの育種に関する試験（第1報）品種間の交配によるF₁, F₂及びF₃の諸形質. 神奈川園試研報43: 83-90
- 山元恭介. 1994. スイートピーの新品種‘ルナ’の育成経過と特性. 神奈川園試研報44: 15-19